環境
エコロジー

大型のココポーマアカフジツボ

外来フジツボ 勢力拡大

日本に侵入・定着 在来種を圧迫

中米パナマ原産のフジツボが本州各地の船舶に侵入し、繁殖を始めていることが、山口寿之・千葉大教授、川井悟史・神戸大教授らのグループの調査で分かった。在来種のフジツボを押しのけて勢力を拡大し始めており、日本の磯の生態系を変えてしまうのではと心配されている。（山本智之）

ダーウィン発見の種

日本への定着が確認されたのは、ココポーマアカフジツボ。大型で、直径は3～4センチになる。日本にもともと分布するアカフジツボに姿がよく似ているが、殻の赤みが強いなどの特徴がある。

繁殖力が強く 17カ所で発見

岱辺から太平洋沿岸の海域に生息する。これまでに千葉、東京、神奈川、静岡、和歌山、兵庫、岡山の計17カ所で見つかった。船に付着して運ばれたとみられ、導入から6年ほどまでに日本で繁殖を始めたとみられる。

ココポーマアカフジツボは繁殖力が強く、在来種のフジツボ類を押しのけるように生息域を拡大。東京湾のような人工的な環境だけでなく、静岡県の伊豆半島など自然に富んだ海岸でも在来種を圧迫して定着し始めている。

岩場に数十個体が群れをつくるように張りつくほか、漁業用の浮きなどにも付着する。日本へ過去に移入された外来フジツボ類に比べて体が大きく、生態系への影響がより大きいと心配されている。また、将来、原子力発電所の冷水口などにも群がり、火力発電所の冷却水口などにも群がり、火力発電所の冷却水口などにも群がり、運転の障害になる恐れもあるという。

海外でも侵入が問題になっている。米国やブラジル、モーリシャス、オーストラリア、ペルー、ケニアなどで定着が確認された。幼生が船に付着して成長し、運ばれた先の海域で新たな幼生を放出したのが原因だと研究者はみる。

実際に、日本とオーストラリアを行き来する大型の鉄鉱石運搬船の船底に、ココポーマアカフジツボの付着が確認された。

日本の研究グループは、国内で見つかったココポーマアカフジツボの遺伝子を解析した。その結果、オーストラリアやブラジルにすむものと同一グループだと判明。近く、英国の生物学専門誌に調査結果を公表する。

海上交通発達 拡散の原因に

富士山のような形をしたフジツボ類は、世界で約4000種が知られている。ココポーマアカフジツボを初めて紹介したのは、今年、生誕200年を迎えた英国の博物学者チャールズ・ダーウィン（1809～82）だ。

進化論で有名なダーウィンは、フジツボの研究者としても活躍していた。「種の起源」を発表する5年前の1854年、パナマ産の標本をもとにココポーマアカフジツボを論文発表している。

ダーウィンが発見したフジツボが、本来は分布しないはずの日本で外来種として定着するようになったのは1980年代以降。日本にすむ115種類のうち、外来種とみられるのは8種で、このうちヨーロッパフジツボやキタアメリカフジツボなど5種が、ダーウィンによって論文発表されたものだ。

ダーウィンは南米の孤島であるガラパゴス諸島を訪れ、隔離された環境で独自の進化を遂げた生物たちを知った。この体験が進化論のヒントになった。そのダーウィンが名付けたフジツボの地理的分布が次々と変化している今の状況は、皮肉な現実といえる。

千葉大の山口教授は「ダーウィンの時代は今のように海上交通機関が発達しておらず、フジツボが外来種として遠く離れた海域に運ばれるチャンスは少なかった。もしダーウィンが現状を知ったら、きっと残念に思うでしょう」と話している。

❶プラスチック製の浮きに付着したココポーマアカフジツボ＝千葉県南房総市、山口寿之・千葉大教授提供
❷チャールズ・ダーウィン＝AP

【環境】